

# 京鹿子

平成十八年六月一日発行  
第百〇二号 毎月一回 日発行

6月号

鈴 鹿 呂 仁

拾 掬 集 其 の 九

星 屑 を 鏤 め る 浜 ほ た る 鳥 賊

ひ と ひ ら の 誘 ひ に 吞 ま れ 花 の 人

花 屑 を 踏 ん で 別 れ の 影 ひ と つ

花 騒 ぐ 戦 な き 世 の 舟 溜 り

伴 連 れ の 浮 雲 ひ と つ 花 洛 の 忌

綾 取 り の 橋 か け て ゐ る 百 千 鳥



囀りの梢の夢間をかけめぐる  
霞晴れ比叡の巔に姫の領布  
新緑を押し出してゐる五山かな  
水守る業ごうの秤は目分量  
辟易の説に頷く桜桃忌  
黒髪の背のうしろ影春の果て  
深緑に溶けて人無き脇参道  
花著莪の灯に透ける水の町

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

花しぐれ

ほたるいかに網目に終の灯を零す

花しぐれ水の匂ひの人とゐる

禅問答すずめ隠れの自在風

花人となるときめきの真中なる

詩ごころ風がもてくる花洛の忌



— 近 詠 —

和田 照海

うしほの香

雛町のいづれの路地もうしほの香

山彦へチャイムを加へ桜まじ

山の子に等しく初音届きけり

山羊鳴いてひかりはじめし草つらら

指切のゆび節くれて昭和の日



松本 鷹根

無垢の空

野良着乾す庭に辛夷の咲き始む

風船を逃がして泣きし無垢の空

彩競ふ鯉に春水滾滾と

山壁の木霊籠もりに山桜

学校の夕日の飛花の風に棲む

## 近 詠



塩貝 朱千

風遊び

そのままになりし約束解氷期

かむなびや貫く一途の雪解川

つくし野や水車ひねもす風遊び

黒皮の手帖のやうな野焼きあと

白木蓮かたまつて咲き睡魔来る

# 英華採集

柳絮飛ぶ安全神話のプロローグ

兵 庫 大 政 睦 子

神話は、時として崩れる事がある。崩れば神話ではなくなる。柳絮が飛ぶ様を春の風物詩として美しさを超えた近未来への一つの決意と捉えた感覚は斬新と言えるだろう。安全安心は、人間の切なる願いであるゆえにプロローグとした下五の結びに共感を覚える。

産着縫ふ針の暇や春の雪

福 知 山 竹 中 龍 平

産着に包まれる生れたばかりの赤子は、産着を通して母親の愛情を受けることになるが、今はその母親は妊婦として我が子の誕生を心待ちにしている。楽しみの反面、経験者しか解らない辛さもあるだろうが、針休めにした一時の刹那に飛び込んだ春の雪が優しくそして明るく労わるように妊婦を励ましている。

善玉も悪玉もなし地虫出づ

城 陽 徳 山 和 子

春になると様々な生き物が地中の闇より地上へと顔を出す。生きとし生けるものは、生を授かった時には善玉も悪玉もなし、と言い切った作者の視線の先に人間の性善説を垣間見る。良し悪しの別れ目は、環境と人間の弱さに起因するのであろうが大局的見地から地球の平和を願うばかりである。



盆 梅 藤岡紫水  
 盆梅の遅速に湖の風姿あり  
 ゆつたりと重ね合ふ波芦芽ぐむ  
 陽炎や半顔乾く野の佛  
 白木蓮のあたりゆつくり暮れゆきぬ  
 口つぼめ雛師は雛の口を描き

鱧の皮 沼田巴字

鱧の皮商家にしかと家訓あり  
 蛇の衣風だけ通すものとして  
 涼しさや荘の直下の港の灯  
 夏場所や荒技ありて一呼吸  
 鉄線花紫雲ただよふ夕まぐれ

隴 丸井巴水

寺の名に鹿の一文忘れ角  
 神の座の山嶺狭し残り雪  
 一段と高き挙手あり土筆の野  
 隴なる通夜に無官の名刺出す  
 碁敵に誘はれてゐる花便り

桜餅 伊藤希眸  
 不揃ひの眉を化粧ひぬ冬ざくら  
 梁鳴らし如月の雨さつと去る  
 菜の花の天地黄に染めいのちなが  
 ふらここに乗り闇を蹴り酔ひ醒す  
 老いに間のあり桜餅ほの薫る

春の雪 北川孝子

余生とはまばたきのやう春の雪  
 追憶の水より淡き梅二月  
 お菓子子の紙のうす紅春の雪  
 茹で卵こつんと立ちし猫の恋  
 梅寒し風が黙つてすれ違ふ

水 仙 直江裕子

刃の痛みかかへて梅の花ひらく  
 野水仙監視カメラの中に咲く  
 もう芽吹くことなき枯れ木だつたのか  
 キリンの首はながあい春の渚  
 ニン月を脱け出す人間マークかな





花 辛 夷 高 木 晶 子

春野菜刻みに刻むお人好し  
 春愁の張りつめてゐる洋酒瓶  
 一音も洩らさぬホール梅固し  
 書き出しの長き空白路の臺  
 あの光る一つに賭ける花辛夷

春 の 雪 木 戸 渥 子

来し方を因数分解のどけしや  
 丸に三角四角も煮えて春うらら  
 涅槃西風母の文箱の父の文  
 春の雪老人ホームに一死あり  
 家具おほかた猫脚春愁きはまりぬ

ステゴザウルス 奥 田 筆 子

ギリシヤてふステゴザウルス冬の星  
 箱馬車の軋しみの楽譜花ミモザ  
 聖し夜オルゴールより偽ダイヤ  
 現し世の權とし落葉箒かな  
 大寒や郵便局は二度鳴らす

笛 方 井 上 菜 摘 子

たんぽぽの絮がとんだから解散  
 梅林や声を出さねばおぼれさう  
 伸び悩む笛方五人囃子かな  
 そのうちに笑ひはじめる春氷  
 比良はきつと雪崩釘をみな掛ける





# 京鹿子集

鈴鹿呂仁選

柳絮飛ぶ安全神話のプロローグ

兵 庫 大政 睦子

紅梅や母の文箱に下駄の音

春暁の目覚まし止めてよりの夢  
山笑ふ子らの裾にゆすぶられ

中空の魔女の爪めく月朧

梅の香やひらめき記す備忘録

アリゾナ 伊吹 之博

シフォンケーキ八つ切りにして春の雲

卒業や平常心の子を横に

産着縫ふ針の暇や春の雪

福知山 竹中 龍平

告白をためらふことなき猫の恋

何処より出て何処へとうかれ猫

子は宝今は句友に春の雲

通勤を一筋変へて春の雪

アメリカの東海岸雪予報

オハイオ 水谷 直子

下宿屋に点る灯や猫の恋

雪の声遠くに聞ゆくもり空

善玉も悪玉もなし地虫出づ

城 陽 徳山 和子

白き雪つもる楽しみ居候

旅の湯の屋根騒がせて猫の恋

春寒し生活大へん主婦の娘や

櫻の芽の口惜しき程の高みかな  
札 幌 野村 鞆枝

猫柳一ト枝程のぬくみかな

露座佛の影大きく深雪晴れ

遠景に雪形置いて船出せり

春の雪猫の足跡ともに消ゆ

春雷や寝返りを打つ障子側

春炬燵東を向いて爪を切る

北窓を開き鳥海山を観る

余寒かな便り度々人も来ず

風なき日亡母思ひ出の雛かざる

啓蟄や夫残せしを整理せず

春遠し衣服の出し入れ面倒で

梅の香を辿れば格子戸女の名

冬の朝園児のバスに母立礼

石鳥居潜れば仄かに梅香る

雪の駅リユツクに長靴子等はしやぐ

笹子鳴く天空までの男坂

持ち駒に歩のひとつあり春障子

梅咲くやひとりの為の停留所

啓蟄や母はそよりと杖を取り

いつもより少し余所行き初句会

冬深く始発電車の燈り射す

春そこに「足鳴らそうよ」歌仲間

明け初むる街我が物に春一番

五六輪つけて老梅洞深し

足湯する梅の香りに解けだせり

急ぐ日々の四肢を緩める梅の旅

訃のメール窓辺に梅の影揺らぐ

肩先のリラの花冷え墨を磨る

春袷露地の止め石濡ればみし

茎立ちのすきまの生活珈琲あつく

紙風船五歳児不思議なひとりごと

豆を撒く締めは闇夜へ高く吼ゆ

春一番世辞も引つ込むご挨拶

磯波のほかは黙する浜水仙

梅日和亀は総出の甲羅干し

土に描く駅までの地図下萌ゆる

残雪や心に傷となる一語

田楽の味噌の焼きたる二枚舌

万歳で送る転勤鳥雲に

家角の大石三つ実千両

ポスト迄のつもり歩きや梅の花

春の蘭ほころびはじめ時めきぬ

春の陽の川面に映る鳥一羽

松 戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

船 橋 元橋 孝之

金子 正道

東 京 野中 圭子

布川 孝子

千 葉 高野 春子

さいたま 神田 惣介

渋 川 東 秋茄子

酒 田 藤波 松山